古代語の謎を解く

蜂矢真郷 著

HANDAI Livre 021
大阪大学出版会

（著者紹介）

蜂矢真郷（はちや　まさと）

1946年生まれ。
京都大学文学部卒業（文学科国語学国文学専攻）。同志社大学大学院文学研究科修士課程修了（国文学専攻）。博士（文学）〔大阪大学〕。
親和女子大学専任講師、同助教授、帝塚山学院大学助教授、奈良女子大学助教授、大阪大学助教授、同教授を経て、現在、大阪大学大学院文学研究科教授（国文学・東洋文学講座〔国語学〕）。
1998年、第17回新村出賞受賞。
主著：『国語重複語の語構成論的研究』［1998・4 塙書房］
『国語派生語の語構成論的研究』［2010・3 塙書房］

阪大リーブル　21

古代語の謎を解く

発行日　2010年3月15日　初版第1刷　〔検印廃止〕
著者　蜂矢真郷
発行所　大阪大学出版会
代表者　鷲田清一
〒565-0871
吹田市山田丘2-7　大阪大学ウエストフロント
電話 06-6877-1614　FAX 06-6877-1617
URL　http://www.osaka-up.or.jp
印刷・製本　亜細亜印刷株式会社

© HACHIYA Masato, 2010　Printed in Japan
ISBN 978-4-87259-305-1 C1381

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉
本書を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書をコピーされる場合は、事前に日本複写権センター（JRRC）の許諾を受けてください。
JRRC〈http://www.irrc.or.jp　eメール：info@jrrc.or.jp　電話：03-3401-2382〉

古代語の謎を解く

蜂矢真郷 著

阿波文庫
徳島県立図書館蔵

HANDAI Livre 021
大阪大学出版会

古代語の謎を解く・目次

はしがき……七

第一章　現代に続く古代語……一三

一　縦と横　一五

タテ［楯・縦］／被覆形タタ［楯・縦］／ヨコ［横］／種々のタテ［縦］・ヨコ［横］／正しくない意のヨコ［横］（一）／タツ［立］とヨク［避］／正しくない意のヨコ［横］（二）

二　男と女　三七

キとミ／コ［子（男）］とメ［女］／ヲ［男］とメ［女］／ヲトコ［男］とヲミナ［女］／男と女

三　ヲ［小］とコ［小］　五八

ヲ［小］／コ［小］／ヲ［小］とコ［小］／ヲ［男］とヲ［小］

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

四　多少と大小　八四

オホシ［多］・オホカリ［多］／オホシ［大］／
オホキニ［大］・オホキナリ［大］／オホキイ（オ）［大］／
スクナシ［少・小］／スコシ［少・小］／
スコシキ［少・小］・スコシキニ［少・小］・スコシキナリ［少・小］／
スコシ［少］とスクナシ［少］／チヒサシ［小］・チヒサナ（イ）［小］

五　高低と深浅　一〇七

ヒキナリ［低］・ヒキシ［低］・ヒクイ［低］／デコボコ［凸凹］／
フカシ［深］・コシ［濃］とアサシ［浅］・ウスシ［薄］／
タカシ［高］とフカシ［深］／タク［闌］とフク［更］

六　ワラフ［笑］とヱム［笑］　一二五

ワラフ［笑］／ヱム［笑］／和歌の中のワラフ［笑］・ヱム［笑］／
ワラフ［笑］とヱム［笑］との意味の差違／
ワラフ［笑］・ヱム［笑］とともにとらえられる語／ワ―ヱの母音交替

第二章　一　音節の語構成要素……一四九

一　ト［利］をめぐって　一五一

形容詞トシ［利・鋭・聡］／鋭利である意の形容詞トシ／鋭敏である意の形容詞トシ／はやい意などの形容詞トシ／動詞トグ［磨］・トガル［尖］／ツゲ［黄楊］・ツガ［樛］・トガ［栂］、ツノ［角］

二　ト［門］・ト［戸］・ト［外］　一六九

ト［門］／ト［戸］／ト［外］／ト［処］／ツ［津］

三　タ［手］・テ［手］など　一九六

テ［手］／被覆形タ［手］と接頭辞タ／トル［取・執・捕］／タク［手］・タタク

四　マ［目］・メ［目］など　二一六

メ［目］／被覆形マ［目］／ミル［見］／メス［見・召・食］／モル［守］・マモル［目守］

第三章　古代からの地名……二四一

一　淡路・信濃――旧国名から　二四四

㈠　淡路　ミチ［道］／接頭語ミ／～チ［路］

㈡　信濃　シナノ／階（シナ）野／風ナ（シ）野

二　島根・新潟――県名から　二六九

㈠　島根　シマ［島］とネ［根］／出雲国風土記の国引き説話／シマネ［嶋根］

㈡　新潟　ニフ［新］とニヒ［新］／ニハ・ニフ―ニヘ・ニヒ／ウヒ［初］・ハツ［初］

三　津・敦賀――市名から　二八八

㈠　津　一音節の地名／一音節の普通名詞

㈡　敦賀　nをルに用いる／角（ツヌ）鹿（カ）／ツノ［角］

四　城崎・和倉――温泉名から　二九九

㈠　城崎　「城崎」と「城の崎」／ノなどの読添え

㈡　和倉　ワ＋クラか／ワク＋ラか／ワク［湧］＋ウラ［浦］

あとがき……三〇九

はしがき

近年は日本語ブームだと言われる。その一方で、古典についての興味は、以前に比べて薄れて行っているようでもある。

そうした中で、古代語に関心を持つ者として、古代語について興味を持ってほしい、これまでよりさらに持ってほしいと願う気持ちを込めて、現時点での最新の研究の一端を、中にはやや難しいこともあるではあろうが、専門的なことをできるだけわかりやすく書くことに留意しつつ、一冊の本の形に表すことにした。ここに書いたことは、古代語についての言わば断片であるが、それらの背後にある大きな問題とそのおもしろさに、少しでも多くの読者が近づいて貰えることを願うものである。

本書に述べること、とりわけ、第二章・第三章に述べることについては、しばしば恣意的な意見が述べられることがあるが、以下に簡略に見る上代特殊仮名遣やアクセントなど、客観的な根拠を持って述べるよう、特に留意した。その点にも注意して見て貰えればと思っている。

上代特殊仮名遣、（古代日本語における音節結合についての）有坂・池上法則、被覆形―露出形、（アクセントについての）金田一法則、古辞書、に関することについては、後の一つ一つの章節のと

ころで述べると、何度も同じことを繰り返すことになるので、ここに、まとめて最小限のことを述べておくことにしたい。

○上代特殊仮名遣

古事記・萬葉集・日本書紀などに見える上代の萬葉仮名において、〔イ列〕キヒミ・〔エ列〕ケヘメ・〔オ列〕コソトノヨロ（古事記においてはモも）とその濁音〔イ列〕ギビ・〔エ列〕ゲベ・〔オ列〕ゴゾドに見える、甲類・乙類と呼ばれる二類の仮名の区別を、上代特殊仮名遣と言う。従来の通説では、イエオの母音に二類があり、上代語は八母音であった、とされている。平安初期まであったコの区別を最後に消滅する。なお、上代とは、奈良時代およびそれ以前を指して言う。

例、ユキ｜［雪］などのキ｜：「吉」「岐」など（キ甲類）、右に傍線を引いて示す。
　　ツキ｜［月］などのキ｜：「紀」「貴」など（キ乙類）、左に傍線を引いて示す。

なお、上代特殊仮名遣とは別のことであるが、やはり平安初期まで区別のあったア行エとヤ行エとについても、ア行エは右に傍線を引いて示し、ヤ行エは左に傍線を引いて示す。

○有坂・池上法則

池上禎造氏「古事記に於ける仮名「毛・母」に就いて」（「国語・国文」2-10［1932・10］）・有坂秀世氏「古代日本語に於ける音節結合の法則」（『国語音韻史の研究』［1944・7 明世堂書店、1957・10増補新版 三省堂］、もと「国語と国文学」11-1［1934・1］）が述べられるところの、古代日本語における音節結合の法則は、有坂・池上法則と呼ばれる。

有坂氏論文には、

第一則　甲類のオ列音と乙類のオ列音とは、同一結合単位内に共存することが無い。

第二則　ウ列音と乙類のオ列音とは、同一結合単位内に共存することが少い。就中ウ列音とオ列音とから成る二音節の結合単位に於て、そのオ列音は乙類のものではあり得ない。

第三則　ア列音と乙類のオ列音とは、同一結合単位内に共存することが少い。

とある。

○被覆形と露出形

有坂氏「国語にあらはれる一種の母音交替について」（『国語音韻史の研究』［前掲］、もと「音声の研究」4［1931・12］）は、名詞・動詞の末尾について、

(a)　エ列イ列に終る形はそれが単語の末尾に立つ場合にも用ゐられ得るものであり、

(b)　ア列ウ列オ列に終る形は、そのあとに何か他の要素がついて一語を作る場合にのみ用ゐられるものである。

と述べられ、(b)を被覆形と、(a)を露出形と呼ばれる。

例、サカ［酒］（被覆形、末尾がア列）・サケ［酒］（露出形、末尾がエ列乙類）

ツク［月］（被覆形、末尾がウ列）・ツキ［月］（露出形、末尾がイ列乙類）

コ［木］（被覆形、末尾がオ列乙類）・キ［木］（露出形、末尾がイ列乙類）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

○金田一法則

金田一春彦氏㈠「現代語方言の比較から観た平安朝アクセント――特に二音節名詞に就て――」（「方言」7-6［1937・7］）・㈡「類聚名義抄和訓に施されたる声符に就て」（『日本語音韻音調史の研究』［2001・1 吉川弘文館］第二編二、もと橋本博士還暦記念会『国語学論集』［1944・10 岩波書店］）・㈢「国語アクセント史の研究が何に役立つか」（『日本語音韻音調史の研究』［前掲］第三編一、もと『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』［1953・5 三省堂］）が、アクセントについて述べられることで、同氏㈢には、

《ある語が高く始まるならば、その派生語・複合語もすべて高く始まり、ある語が低く始まるならば、その派生語・複合語もすべて低く始まる》

とある。これを金田一法則と言う。高く始まるものを高起式、低く始まるものを低起式と呼ぶ。

平安末期の一種の漢和辞典である類聚名義抄などの、片仮名などの訓に声点が差されており、仮名の左上の声点は、上声と呼ばれて（「上」と示す）高いアクセントを表し、仮名の左下の声点は、平声と呼ばれて（「平」と示す）低いアクセントを表し、また、例は多くないが、仮名の右上の声点は、去声と呼ばれて（「去」と示す）上がるアクセントを表し、仮名の左下やや上の声点（この声点が見える文献は限られている）は、平声軽と呼ばれて（「東」と示す）下がるアクセントを示すことが知られていて、これらを利用して考える。

なお、類聚名義抄の諸本について、「図」「高」「観」と示したのは、それぞれ図書寮本・高山寺

本・観智院本を表している。

さらに、声点が横に二つ並んだ双点のものは濁音を表している（「平」「上」などに傍線を引いて示す）。

○古辞書

新撰字鏡は、平安初期の一種の漢和辞典で、和訓のある辞書では現存最古のものである。

和名類聚抄は、平安中期初めの一種の百科事典で、十巻本と二十巻本とがあり、巻によって、より古いと見られる例を挙げるようにした。地名は、二十巻本にしか見えない（第三章冒頭参照）。声点のある本もある。

類聚名義抄については、「金田一法則」の箇所で既に見た。

色葉字類抄は、平安末期の、一種の国語辞典である。前田本には声点がある。

また、以下に挙げる用例は、できるだけ訓み下し文を示すようにし、原文の必要部分を山括弧内に合わせ示すようにした。

なお、この「はしがき」に振仮名を付したものは、後の章節では基本的に振仮名を付さないことにしたい。

本書には今昔文字鏡を使用した箇所があることをお断りしておく。

第一章　現代に続く古代語

この章では、現代に続く古代語をとり挙げる。つまり、現代で普通に用いられる語が、古代語ではどのようであったか、古代からほとんど変わらない語もあれば、いろいろな変化を経ている語もあるが、それらの様相を明らかにして行きたい。また、古代語がどのように構成されているかなどを考えると、現代語だけを見ていては気づかれないことが見えてくることがしばしばある。それを見出だすことには、あたかも謎を解くようなおもしろさがあると言える。

具体的には、「一　縦と横」「二　男と女」「三　ヲ［小］とコ［小］」「四　多少と大小」「五　高低と深浅」「六　ワラフ［笑］とヱム［笑］」のように、対比的にとらえられる語などを意図的に選んだ。対比するということは、両者の性格を明らかにしようとするのに、最も基礎的な方法であると言えよう。

このうち、「一」「二」は対義語の範囲に入り、「三」「六」は類義語の範囲に入る。「四」は、「多」と「少」、「大」と「小」とはそれぞれ対義語に当たるが、「多」と「大」、「少」と「小」とはそれぞれ類義語に当たり、「五」は、「高」と「低」、「深」と「浅」とはそれぞれ対義語に当たるが、「高」と「深」とも対義語に当たるというものであり、その意味で、「四」と「五」とはやや複雑である。その他、「三」は「二」に対して補足的な面を持っている。これらの一つ一つは無論のこと、全体としてのおもしろさを汲み取って貰えれば幸いである。

一　縦と横

現代語のタテ［縦］・ヨコ［横］については、國廣哲彌氏編『ことばの意味3　辞書に書いてないこと』[1]、岩野靖則氏㈠「タテ・ヨコの基本的意義」[2]、久島茂氏『〈物〉と〈場所〉の対立　知覚語彙の意味体系』[3]が述べられ、また、上代～近世のタテ［縦］・ヨコ［横］については、岩野氏㈡「タテ・ヨコの成立」[4]が述べられる。それら、とりわけ岩野氏㈡をも参照しつつ、古代語のタテ［縦］・ヨコ［横］について見ることにしたい。

タテ［楯・縦］

まず、タテの例を挙げるが、タテ［楯］とタテ［縦］とがある。

タテ［楯］

タテ［楯］　……木幡の道に逢はしし嬢子　後手は小楯ろかも〈袁陁弖呂母〉歯並みは椎菱なす……（古事記・応神・四二）

右のタテ［楯］の例は、ヲトメ（古事記本文によると「矢河枝比賣」）の形容で、「木幡の道で出会った乙女。後ろ姿はまっすぐで、楯のようだ。歯並びは椎の実や菱の実のようにまっ白だ。」（土橋寛

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com